

## ハンス・ヨーナス『責任という原理』への二つの視角

「現今の戦争に対する我々の関わり」をめぐって

吉本陵\*

### 序

テクノロジー文明における倫理学としての責任倫理学の必要性を訴えた著作『責任という原理<sup>1)</sup>』(1979)で知られるユダヤ人哲学者ハンス・ヨーナス(Hans Jonas 1903-1993)は、第二次世界大戦の勃発に際して同胞であるユダヤ人たちに対ナチ戦争への参加を呼びかけたパンフレット「現今の戦争に対する我々の関わり——ユダヤの男たちへの言葉<sup>2)</sup>」(以下、「現今の戦争」と省略)を残している。本稿の目的は、このパンフレットが後年の著作である『責任という原理』と共有する論点を取り出し、ヨーナスの論じる責任倫理学を理解するための手掛かりとなる二つの視角を提示することである。そしてその作業を踏まえて、パンフレット「現今の戦争」がヨーナス哲学の全体の中で占めている位置について最後に言及したい。

### 1 パンフレット「現今の戦争」について

ドイツで生まれ育ち、ハイデガー及びブルトマンのもとで順調に大学でのキャリアを積み、研究者としての将来を嘱望されていたヨーナスは、ヒトラーが1933年に政権を奪取し、ユダヤ人への排斥運動が激化した時点で、ドイツを離れ亡命する決意を固める。シオニストでもあったヨーナスは、イングランドを経由してパレスチナに向かい、そこでドイツに残った自身の家族を含むユダヤ人の運命を固唾をのんで見守ることになる。そのヨーナスにとって、1939年にポーランドに攻め込んだドイツに対してイギリスとフランスが宣戦を布告し、第二次大戦が開始したことは大きな福音であった。連合国軍の一員に加わることができれば、対ナチ戦争に参画する機会を得ることができると思われたからである。ユダヤ人はユダヤの誇りをかけてナチとその反ユダヤ主義に立ち向かわなければならない——かねてからそのような思いに駆られていたヨーナスはただちに戦争への参加をユダヤ人に呼びかける文書の執筆に取り掛かり、同胞

\* 大阪府立大学人間社会学部客員研究員。大阪府立大学工学域非常勤講師。

<sup>1</sup> [PV]. (書誌情報は本稿末尾の文献一覧を参照のこと。)

<sup>2</sup> „Unsere Teilnahme an diesem Kriege. Ein Wort an jüdische Männer.“ のちにヨーナスの晩年に口述された『回想録』にその全文が収録されるかたちで出版された。Vgl. [Er] S.186-199.

の閲覧に供した。それがパンフレット「現今の戦争」である。ユダヤ人の置かれている現状についての認識からヨナスは筆を起す。ヨナスの重い問題意識が格調の高い文章で表現されているきわめて印象深い箇所でもあるので、少々長くなるが途中省略をはさみながら冒頭の文章を以下に引用したい。

我々の時代がやってきた。この戦争は我々の戦争である。絶望と希望を胸に抱きながら、塗炭の苦しみを味わってきた年月の中で待ちわびていたのは、今この瞬間である。我々の民族（Volk）が無力にも被ったあらゆる屈辱、あらゆる不正、あらゆる物質的強奪と道徳的冒瀆のあとで、ついに武器を手にとって我々の宿敵に正面から立ち向かい、名誉の回復を要求し、同時に我々が最初に支払った勘定を偉大な報復でもって埋め合わせ、終始一貫して我々の敵であるとともに世界の敵でもある者を打ち倒すことに積極的に加わることが許される瞬間が来たのだ。 […]

昨今における個人的な体験から生じる個々人の感情については語るまい。我々の人生に射す暗い影、我々が受けた仕打ちに対して心の奥底で燃え盛る恥辱の感情、報復を求める正当な渴望、そういうものについても語るまい。我々が声を大にして訴えたいのは、ヒトラー主義に対抗するこの戦争がわが民族の大義（Sache）であるのは何故か、ということである——現にこの戦争においてはわが民族の絶対的な意味での大義がかかっているのだから。ヒトラーによって戦いへと挑発されている民族があるとすれば、それはわが民族である。荣誉と利害のために戦いを引き受け、最大の犠牲をも覚悟するという義務を負う民族があるとすれば、それはわが民族である。現在ヒトラーに対抗して同盟を組んでいるどの国家とも比較にならぬほど、我々は激しくヒトラーによって攻撃を加えられ、絶滅によって脅かされている。また他のどの国家とも比較にならぬほど、我々の一切切切が我々の間近で問題となっている。他の国家においては、何らかの利害が、つまり国民、文化ないし帝国の生存の何らかの側面が危険にさらされている。脅かされているのは、彼らが地上において占める場所の——たとえどれほど主要な部分であれ——**一部分**である。世界原理にまで拡張しようとしているナチ原理は、我々においては人間としての尊厳の核心に、また同時にただ地上に生存しうるだけの可能性の核心に、狙いを定めている。我々はナチ原理の形而上学的な敵（metaphysischer Feind）であり、それが誕生を告げたその瞬間から予定されていた犠牲者なのである。ナチ原理か我々か——そのどちらかが地上に命脈を保つうちは、両者に安息は許されない<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> [Er] S.186-188. 強調は原文。

「我々の時代がやってきた。この戦争は我々の戦争である」——ヨナスはそう宣言し、ヒトラーと対決するこの戦争においてはユダヤ民族の大義が懸っているのだと訴える。ここで言われている「大義」の内実は、以下に見るように、（１）ユダヤの防衛戦争（Verteidigungskrieg）、（２）ユダヤの生存が賭けられた戦争、（３）ユダヤの遺産が賭けられた戦争、の三つに分節することができる。ヨナスの言うところにしたがってそれぞれ簡潔にまとめておこう。

### （１）ユダヤの防衛戦争

ヒトラーが仕掛けた戦争はユダヤ人の絶滅を目指すものであり、ユダヤ人は「形而上学的な敵」として最大の標的となっている。それはユダヤの存在の全体を脅かす「全面戦争（totaler Krieg）<sup>4</sup>」である。したがって、ユダヤ人にはユダヤの旗を立てて戦う義務がある。他のどの国民よりも戦う義務がある。ユダヤ人が「我々の戦争」において支払うべき犠牲が、他のどの国民よりも僅少であるというわけにはいかない。この戦争の目的はヒトラーの打倒であり、ただそれだけである。何らかの政治的な利益の獲得を、例えばパレスチナにおけるユダヤ民族の発言力の強化を、この戦争に参加するための条件としてはならない。そのような「見返りを求める計算高い態度（>do ut des<-Haltung）<sup>5</sup>」はこの戦争においては不要である。そうすることによってのみ、ヒトラーと対峙するこの戦争を「純粋な防衛戦争<sup>6</sup>」とすることができるからである。そしてユダヤ人は躊躇なしにこの戦争への参加をたんに「申し出る（Angebot）」というのではなく、決然として「要求（Anspruch）」しなければならない<sup>7</sup>。

### （２）ユダヤの生存が賭けられた戦争

この戦争は近代においてユダヤ民族がユダヤ民族として参加することになる最初の戦争である。つまり、さまざまな国民の一構成員として参加するのではなく、ユダヤ民族の名の下に参加する最初の戦争である。近代においては、ユダヤ人が一方の側に立って戦争に加わるということは全体としては不可能だった。しかしながら、この戦争においてはユダヤ民族それ自体が敵として名指されており、ユダヤの生存そのものが危機にさらされている。その意味で、この戦争はユダヤ民族にとって近代の歴史上比類のない戦争であり、「語のもつと

---

<sup>4</sup> [Er] S.188.

<sup>5</sup> [Er] S.197.

<sup>6</sup> [Er] S.198. 強調は原文。

<sup>7</sup> [Er] S.198.

も深い意味での『ユダヤ戦争 (bellum judaicum) 』<sup>8</sup>』であると言うことができる。ユダヤ民族がその故国を追われることになった最後のユダヤ戦争は破局の戦争であったが、我々の時代におけるこの戦争はユダヤ民族の破局を自分たちの手で救い、ユダヤ民族の生存を守る戦争でなければならない。

### (3) ユダヤの遺産が賭けられた戦争

またこの戦争は比喩的な意味で近代における最初の「宗教戦争 (Religionskrieg) <sup>9</sup>」でもある。すなわち一方には、ユダヤの遺産であるキリスト教的—西洋的人間性を受け継ぐ者たちがあり、他方には「人間蔑視の力 (menschenverachtende Macht) <sup>10</sup>」を崇拜する者たちがいる。後者は西洋におけるユダヤの遺産を絶対的に拒否する者たちである。対決しているのはこれら二者であり、その意味で後者の核にあるナチ原理は「もっとも深い意味での異教 (Heidentum) <sup>11</sup>」を体現している。その結果、ナチ原理という「もっとも深い意味での異教」との敵対関係によって、ユダヤ教とキリスト教的—西洋的文化とを結びつける共通の基盤が浮かび上がる。こうしてこの戦争においては、キリスト教社会にも継承されたユダヤの歴史的な遺産も賭けられることになる。したがって、これはたんにユダヤ民族の生存が賭けられているという意味を超えた意味においても「ユダヤ戦争」なのである。今や「ユダ (Juda) が世界と対決するのではなく、ユダが世界とともに世界の敵と対決する<sup>12</sup>」のだ—。

\*

\*

以上のようなかたちで、ヨーナスはパンフレット「現今の戦争」の中で、「ユダヤの男たち」に対して自ら名乗り出るべきこの戦争の「大義」を訴えかける。これはユダヤの「生存」と「遺産」が賭けられた戦争であり、それを守るための「防衛戦争」として、ユダヤ自身によって戦われなければならないところの「我々の戦争」なのだ、と。ヨーナスは同胞を奮い立たせるべくパンフレットを次のような一節で締めくくる。

ユダヤの男たちよ！物心のついたのちに世界大戦を体験した世代は、軽率に戦争に首を突っ込んだりしないし、戦争の恐ろしさを見くびったりも

---

<sup>8</sup> [Er] S.194.

<sup>9</sup> [Er] S.194. 強調は原文。

<sup>10</sup> [Er] S.194.

<sup>11</sup> [Er] S.194. 強調は原文。

<sup>12</sup> [Er] S.194.

しない。とはいえ、ヒトラーによる恥辱の六年間を知っている我々は、戦争の恐ろしさを知りながらも、必ずやこの戦争はユダヤ人によって着手され、もっとも困難な場所で、そして我々が我々の宿敵に直接対面できる場所で、剣をもって戦われることを誓う。我々は、この戦争へと参加する決断のために、確かな結末に至ることができると自分自身に装う必要もない。それとは別の選択肢がどのようなものであるかを知るだけで十分なのだ。西欧列強が勝利を収めるならば——我々はそう信じているが——ヒトラーは没落し、ユダヤ民族にとって生活の展望が回復する。ヒトラーが勝利を収めるならば、それはここ [パレスチナ] だけでなくあらゆるところでの我々の没落を意味する。そうであるならば、我々は少なくとも戦いながら没落していくことを望む。とはいえ、強大な歴史の過程の始まりの時点において、目の前にある目標を超えて見通しを求めようとし、その後世界はどうなるだろうかと問うことは余計なことである。行為に移るためには、目前の目標で十二分なのだ。それはすなわちヒトラーを打ち倒すことである。我々の子孫がいつの日か我々のことを恥ずかしく思う必要のないように行動しようではないか<sup>13</sup>。

## 2 『責任という原理』への二つの視角

1で概観したパンフレット「現今の戦争」は、ユダヤの暗い歴史の中で、一人の哲学者が何を考え、何を主張したかを私たちに教えてくれるものであり、それ自体が歴史的な意義をもつ貴重なドキュメントであると言える。しかも、実は、ヨナスの活動に強い印象をもっていた友人たちのなかでも、ヨナスの呼びかけに応じて戦争に志願した者はほとんどおらず、中断を経ることなく戦争に関わったという点ではヨナスはただ一人の例外であった<sup>14</sup>。またこのパンフレットを草したとき、ヨナスはすでに三十六歳になっており、実際にイギリス軍に一将兵として加わったのはその翌年のこと、戦勝国軍の一員として第二次大戦の終結を見たときには彼は四十二歳の年を迎えていた。パレスチナから「知識人」の一人として例外的に軍に志願し<sup>15</sup>、三十代の後半から四十代の前半という将兵としては決して若くはない年齢を押して、そして研究者としては脂の乗った貴重な時期を犠牲にして自ら戦線に赴いたこと、つまりパンフレットのなかでヨナスが同胞の者たちに訴えた事柄は、他ならぬヨナス自身

<sup>13</sup> [Er] S.199. 強調は原文。[ ] 内は引用者による補足。

<sup>14</sup> [Er] S.203-204.

<sup>15</sup> パレスチナ在住の大学関係者 (Akademiker) の中で自発的に軍に志願したのはヨナス以外にもう一人いただけであったという。Vgl. [Er] S.205.

の人生の中で実際に決断され、ヨナスによって生きられていること——この事実はこのパンフレットがもつ重みをいっそう増すものであると言える。

しかしながら、それだけではない。ヨナス哲学に内在した視点からも、このパンフレットは重要なものである。本稿では、後年ヨナスの名を広く世に知らせることになった『責任という原理』で提示された責任倫理学との関わりについて指摘することにしたい<sup>16</sup>。すなわち、パンフレット「現今の戦争」は、一方では『責任という原理』における責任倫理学のラディカリズムを支える背景となっており、他方では危機の到来を人びとに告げる「警告」の書として、『責任という原理』と共通の特質をもっているということである。以下では、この二点をパンフレット「現今の戦争」から取り出される『責任という原理』の読解のための二つの視角として、順に論じていきたい。

## 2-1 責任倫理学のラディカリズムの由来

ヨナスは責任倫理学において、私たちがその果実を享受しているテクノロジー文明の行く先には生態学的な危機によって人類が自滅するに至るというシナリオがありうることを認め、何よりもまず「人類が存続すること」を倫理学の第一の命令としなければならないと説いた。テクノロジー文明の住民である私たちは、危ぶまれる未来の人類の存続に対して責任を負っているとヨナスは考えていたのである。ここから分かることは、責任倫理学の必要性を訴えるヨナスがまっすぐに見据えていたのは、未来の人類の存続に対する危機だったということである。ヨナスはその責任倫理学において、従来の倫理学にとって大前提であった「人類の存続」はもはや前提ではなくむしろ新しい義務の対象となったのだと主張した。

同様に、パンフレット「現今の戦争」においてもまた、同種の危機意識が——ただしこの場合は人類の存続ではなくユダヤ民族の存続に対する危機意識であるが——ヨナスの記すテキストを突き動かしている。ナチはユダヤの「形而上学的な敵」であり、ナチがユダヤに仕掛けているこの戦争は「全面戦争」であるというヨナスの言葉は、この戦争においてまさしくユダヤの存在それ自体が懸っているという進行中の危機を同胞の意識に訴えかけるものに他ならなかったのである。したがって『責任という原理』とパンフレット「現今の戦争」においては、「人類」であるにせよ、「ユダヤ民族」であるにせよ、その「存

---

<sup>16</sup> 別の視点としては、ヨナスが戦争からの帰還後、1950年代から60年代にかけてかつての師であるハイデガーに対して行った息をのむような批判との関わりを挙げることができる。この点については本稿では扱うことができていない。注で示唆するにとどめる。この論点については本稿の結の部分で今後の課題として取り上げている。

続」が眼前の問題となっているという点では軌を一にしている、と言えるだろう。

とはいえ、確かにパンフレット「現今の戦争」と『責任という原理』とでは、危機にさらされているものが違うし、危機を引き起こしている原因も別物である。また『責任という原理』のキーワードである「責任 (Verantwortung)」という言葉がパンフレットの中で用いられているわけでもない。したがって、両者の議論を単純に同一視することは当然できない。しかしながらそれにもかかわらず、パンフレットの結びの一文である「我々の子孫がいつの日か我々のことを恥ずかしく思う必要のないように行動しようではないか」という呼びかけは、やはり未来の人類に対する責任を現在世代の私たちに呼びかける『責任という原理』の一節としてそのまま用いることができるだろう文章であるし、パンフレットの別の箇所で見られる「ユダヤ教が存在しえない世界、ユダヤ人が生存しえない世界、そしてユダヤ人にとって生存するに値することさえない世界、そのような世界が拡大しはじめた<sup>17)</sup>」という文章において表明されている危機意識、つまりユダヤ人が住まうことのできる世界が破壊されはじめていくということに対する危機意識は、『責任という原理』の根本モチーフとなっている「住まいとしての世界の存続 (Weiterwohnlichkeit der Welt)<sup>18)</sup>」に対する危機意識と通底している。『責任という原理』の中で、未来に対する責任として、人類の住まいとしての世界を守らなければならないと主張したヨナスは、『責任という原理』に先立つ四十年前に、「(ユダヤ人である) 我々の子孫」のために戦争に参画し、「ユダヤ人にとって生存するに値する世界」を守らなければならないと主張していたのである。

したがってパンフレット「現今の戦争」は、後年の『責任という原理』でもう一度別のかたちで具体化されることになるモチーフをすでに含んでいたと見なすことは十分に可能だろう。ヨナスが『責任という原理』で示した人類の存在に対する明敏な危機意識は、自身がかつて実際に経験した存在に対する危機、つまりユダヤ民族の存在が地上から一掃されうるという危機をくぐり抜けることによってあらかじめ培われていた、ということが両者を対照させることから見て取ることができるのである。

---

<sup>17)</sup> [Er] S.189-190. 強調は原文。

<sup>18)</sup> これはヴィーゼとジェイコブソンが編者を務めた論集 (*Weiterwohnlichkeit der Welt. Zur Aktualität von Hans Jonas.*) のタイトルの中の表現である。管見の限りでは、ヨナスはこの語を用いていないが、ヨナスの責任倫理学の主張を的確に言い当てていると思われる。ヨナスは『責任という原理』の中で「世界」について次のように語っている。「善 (das Gute) とは世界のなかにある関心事 (Sache) であり、もっと言えば世界という関心事なのである」 ([PV] S.162)。善であるところの「世界という関心事 (Sache)」から発せられる「存在当為 (Seinsollen)」に答えることがヨナスの言う「責任」である。

ナチの第三帝国時代における「ユダヤ民族の存在それ自体」の危機はヨナスにとって身に迫る経験であった。そうであるならば、二十世紀末における「人類の存在それ自体」危機はなおのこと、倫理学のたんなる理論的な課題にはとどまらない現実的な課題であり、また喫緊の課題でもあったと思われるであろう<sup>19</sup>。ヨナスは『責任という原理』において、人類の存続の危機に際して人類の存続そのものを守ることを第一の命令として措定するという「語のもっとも深い意味で」ラディカルな、つまり根源的な倫理学を構想し、倫理学の原理<sup>20</sup>をラディカルに問い直すことができた。そのラディカリズムは、責任倫理学の命法が、かつてのパンフレットの中で示されたような、ユダヤ民族の危機に際して没落を回避しなければならないという決意をその前駆形態とし、そのような危機を察知する感受性をアリアドネの糸として、危うい人類の存続そのものを義務の対象とするところまで突き詰められることによって到達されたものなのである。

このような視点から見れば、ヨナスのナチ体験が生み出したパンフレット「現今の戦争」は、後年の責任倫理学の意図されざる萌芽であるとともに、そのラディカリズムを準備するものだったと言えるだろう。

## 2-2 警告者としてのヨナス

次に指摘したいのは、パンフレット「現今の戦争」と『責任という原理』の両者を繋ぐ「警告の書」という接点についてである。

ヨナスはギムナジウム時代からシオニズムに傾倒していたのだが、それはユダヤ人のドイツ社会への「同化」に対する懐疑からだった。少年時代から街中で反ユダヤ的な感情に接していたヨナスは、大方の同化ユダヤ人<sup>21</sup>とは異なり、ドイツ社会における反ユダヤ主義は「同化」の進展とともに解消されていくものではなく、むしろこれからも繰り返し再燃するだろうと考えていた。ユダヤ人の将来がドイツでは期待できないならば、残された希望はパレスチナの地であると判断したのである<sup>22</sup>。

---

<sup>19</sup> 「残ったのが移ろいゆくものだけであり、同時にそれに対して行使される私たちの力がこれほどまでに強大なものになってしまうと、その道徳的な帰結は法外なものである。しかしながらこれまでのところそれはまだ不明確なままにとどまっている。私たちが取り組んでいるのはまさしくこの問題なのである。」 ([PV] S.226.)

<sup>20</sup> ヨナスの倫理学が「責任倫理学」であるのは、責任という概念があらゆる倫理学を支える拠点になっているからであり、それゆえ責任は、著作の表題（『責任という原理』）の通り、語の本来の意味での「原理（*principium*：始め、源）と呼ばれるのである。

<sup>21</sup> ヨナスもまた、紡績業で成功を収めた裕福な同化ユダヤ人の家庭で生まれ育った。

<sup>22</sup> ヨナスとシオニズムとの関わりについては、[Er]の第二章から第三章にかけて述べられている。



そのヨナスにとって、ドイツにおけるナチの台頭はパレスチナへと移住する決意を早めさせるものであった。故国ドイツに年老いた両親を残して辿り着いたパレスチナの地で、ヨナスは「ナチ原理」がヨーロッパで席卷するさまを目の当たりにし、危惧の念をいっそう強めた。今こそユダヤ民族は武器を手を立ち上がらなければならない。なぜなら、他ならぬユダヤ民族が「ナチ原理」によってその存在を根こぎにされるべきものとして名指されているからである。さもなければユダヤ民族はおのれの生存と、おのれに対する自尊心と、世界から支払われるべき敬意とを失うことになるだろう<sup>23</sup>——ヨナスがパンフレット「現今の戦争」の中でこのような警告を発したことはすでに見たとおりである。

この間、ヨナスは一貫して少数者の側にいた。ドイツ社会におけるユダヤ人は少数者であった。同化ユダヤ人の中でシオニズムに賛意を示した者は少数者であった。さらには、先に触れたように、在パレスチナのユダヤ知識人のうち、対ナチ戦争に参画した者はただ一人の例外を除けばヨナスだけであった。しかしながら、ヨナスがドイツを去ったのち、ドイツにおけるユダヤ人排撃がいっそう激しさを増した時期に、あるユダヤ婦人がヨナスの母親にこう言ったという——「あなたのご子息は本物の預言者でしたわ<sup>24</sup>」。多数者の意見に抗して自らの信念にしたがい、少なくとも結果的にはその信念の正しさを証したヨナスの姿に、そのユダヤ婦人は、聖書の中の預言者の現身を見たのであった。

事実、ヨナスは少年時代から、律法を記す「モーセ五書」よりもむしろ「預言書」の方に強い関心を抱いていた。ヨナスによれば、預言とは人間の口から発せられた神の言葉であり、多くの民衆の耳に痛いこと、民衆の聞きたがらないことがあえて語られたものであり、預言者とは民衆の甘い期待に反して警告を発する者であった<sup>25</sup>。シオニズムに傾倒し、ナチの台頭するドイツに見切りをつけ、迫害の憂き目に遭っている同胞に向けて対ナチ戦争の大義を掲げたヨナスの姿には、ヨナス自身の真意はどうあれ、確かに彼が少年時代から親しんでいた預言者の姿を重ねることができる。その意味でパンフレット「現今の戦争」の著者ヨナスもまた、かつての「預言者」がそうであったように、ユダヤにとっての困難な時代における一人の警告者であったとすることができるだろう。

「現今の戦争」の執筆時期から隔たること四十年後に執筆された『責任という原理』もまた、上で記した「現今の戦争」と同一の精神によって貫かれているとすることができる。なぜなら『責任という原理』は「テクノロジー文明に

---

<sup>23</sup> Vgl. [Er] S.192.

<sup>24</sup> [Er] S.73. ヨナスにとってこのエピソードは印象深いものだったらしく、彼は別の箇所でも記録に残している。Vgl. [EV] S.57.

<sup>25</sup> ヨナスの語る預言者のイメージについては、[Er] S.66-68 を参照。

おける倫理学」の原理として、従来のあらゆる倫理学の基盤であった地上における人類の生存そのものが、二十世紀後半において危機に曝されているという警告を発し、その最悪の事態を回避することを命ずるものだったからである。パンフレット「現今の戦争」においてナチの迫りくる軍靴の音に対して、「ここまでだ！それ以上進んではならない！<sup>26</sup>」という声を上げ、超えてはならない最後の一線が踏み越えられようとしていることに対して警告を発したのと同様の意味で、ヨナスは『責任という原理』においても、踏み越えてはならない最後の一線が踏み越えられようとしていることに対して、つまりあらゆる倫理学の基盤であるところの「人類の存続」を危うくする一線が踏み越えられようとしていることに対して、警告を発したのであった。ユダヤの伝統の中にある「預言書」が「警告の書」であるならば、『責任という原理』はまさしく哲学の衣装をまとった「預言書」でもあったのである。

ヨナスは晩年のインタビューの中で、『責任という原理』の中で記した「人類は存在しなければならない」という命法が、果たして二十世紀の政治経済体制<sup>27</sup>の中で現実に遂行されうる（können）のかという問いに対しては、素直に「分からない」と答えている<sup>28</sup>。ヨナスが慎ましくも示したのは、「人類の生存の保護」は人類自身の責任として遂行されるべき（sollen）であるということであった。超えてはならない一線がそこに引かれているということを示し、警告の声を上げること——そのような役割を自ら担うことが、対ナチ戦争に立ち上がることを決意した三十代のヨナスと、爛熟するテクノロジー文明のただなかで思索を続けた七十代のヨナスとを繋ぐ接点であるとともに、ユダヤ教の「預言者」の伝統に連なる、ヨナスの終生変わらぬ哲学者としての構えだったのである。

## 結

本稿では、ヨナスがナチ時代において書き上げたパンフレット「現今の戦争」を手がかりとして、ヨナスの倫理学上の主著である『責任という原理』を読み解くための二つの視角を提示した。それらを簡潔にまとめると次の通りである。

---

<sup>26</sup> [Er] S.188.

<sup>27</sup> 『責任という原理』の初版が刊行されたのは、冷戦の帰趨の定かならぬ時期であった（1979年）。そのような時代状況の中でヨナスは、「人類の存続」の確保という視点から、西側と東側のどちらの体制にも与することなく、双方のメリット・デメリットを醒めた（nüchtern）まなざしで分析・評価した。[PV]の第五章および第六章参照。

<sup>28</sup> Vgl. [DE] S.21.

一つは責任倫理学のラディカリズムの由来という視角である。『責任という原理』の中で提示された「人類は存在しなければならない」という命法がもつラディカリズムの背景には、ヨナナスにパンフレット「現今の戦争」を書かざるを得なくさせたナチ時代におけるユダヤ民族の経験があった。そのような経験があったがゆえに、ヨナナスは「人類の存続」そのものを倫理学の根源的な義務とするというラディカルな理論を打ち出すことができたのであり、責任倫理学の命法は、その経験に裏打ちされることによってその衝迫力を獲得したのである。

もう一つは、ヨナナスの思考のスタイルとしての「警告」という視角である。ヨナナスはユダヤの危機の時代に際して鋭い警告を発した。「本物の預言者でした」というあるユダヤ婦人の言葉は、シオニストとしてのヨナナスの言動に向けられたものであったが、そのようなヨナナスの明敏な危機意識は、『責任という原理』の中で、テクノロジー文明における人類の生存の危機に対する鋭い警告というかたちでもう一度姿を現わすことになる。両者に通底するのは、ユダヤ教の伝統における警告者としての「預言者」のイメージであり、それは青年時代のヨナナスがものしたパンフレット「現今の戦争」という文書から、晩年のヨナナスが著した『責任という原理』という作品にまで伸びるヨナナス哲学の一つの重要な水脈となっているのである。

最後に今後の課題について記すとともに、パンフレット「現今の戦争」がヨナナス哲学全体の中で占める位置についても触れておきたい。

本稿の1で見たように、ヨナナスはパンフレット「現今の戦争」の中で、対ナチ戦争を二つの意味で「ユダヤ戦争」であると指摘していた。すなわち、対ナチ戦争はユダヤ民族の生存が賭けられているという意味で「ユダヤ戦争」であるとともに、西洋文化におけるユダヤの歴史的な遺産が賭けられているという意味でも「ユダヤ戦争」である、と。しかしながら、本稿で扱ったのはもっぱら前者の側面のみであって、後者の側面、換言すれば「もっとも深い意味での異教に対する戦争」という側面については言及することができなかった。

実は、本稿であつかえなかった後者の論点は、ヨナナスが第二次大戦後に行ったかつての師であるハイデガーに対する断固とした批判にも関わっている<sup>29</sup>。ヨナナスのハイデガー批判は、ハイデガー哲学の中にある「異教」の響きに対するものでもあるからである<sup>30</sup>。さらに言えば、ヨナナスの博士論文の主題であ

<sup>29</sup> Vgl. “Heidegger und die Theologie” in [HT]. また本稿の注 17 でもこの点に言及した。

<sup>30</sup> ヨナナスはハイデガー批判を行った講演の中で、ハイデガーに好意的なプロテスタント神学者の聴衆たちに次のように呼びかける。「あなた方にはハイデガーの思惟を身にまとった根深く異教的な性格 (tief heidnischer Charakter von Heideggers Denken) が感じられないのでしょうか？」 ([HT] S.327.)

ったグノーシス主義もまた一つの「異教」である<sup>31</sup>。こうして、ナチ・（後期）ハイデガー・グノーシス主義の三者がヨナナス哲学の仮想敵としてその射程に収められた「三つの異教」として浮かび上がる。これら互いに異なる三つの対象に対するヨナナスの批判の共通点を探り当てることができるならば、そこからヨナナス哲学のポジティブな姿を逆照射することができるだろう。

この点を論究することは今後の課題としなければならないが、上記の概略像から見えてくるのは、第二次大戦中に執筆されたパンフレット「現今の戦争」は、本稿で指摘したように倫理学上の主著である『責任という原理』との連関をもつだけでなく、第二次大戦以前のグノーシス主義研究と第二次大戦以後のハイデガー批判の双方とも連関をもっているということである。とするならば、パンフレット「現今の戦争」は、宗教哲学研究を志した若きヨナナス、対ナチ戦争の死地をくぐり抜けてかつての師であるハイデガーを批判した壮年のヨナナス、そして時代の要請に応えるべくテクノロジー文明のための倫理学を世に残した晩年のヨナナスを接続する蝶番の位置にある文書であると言えるだろう。本稿はこの暫定的な仮説の最後の部分を明らかにし、『責任という原理』を理解するための手がかりとなる二つの視角を提示するものであった。

## 文献一覧

### ◇ ハンス・ヨナナスの著作・論文

- DE: *Dem bösen Ende näher. Gespräch über das Verhältnis des Menschen zur Natur.* Hrsg. Wolfgang Schneider Suhrkamp Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main. 1993.
- Er: *Erinnerungen.* Insel Verlag, Frankfurt am Main und Leipzig, 2003. (『ハンス・ヨナナス「回想記」』 盛永審一郎、木下喬、馬淵浩二、山本達訳 東信堂、2010年。)
- EV: *Erkenntnis und Verantwortung. Gespräch mit Ingo Hermann.* Lamuv Verlag, Göttingen, 1991.
- GG1: *Gnosis und spätantker Geist. Erster Teil: Die mythologische Gnosis.* Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1934/1988.
- HT: „Heidegger und die Theologie.“ *Heidegger und die Theologie. Beginn und Fortgang der Diskussion.* Hrsg. Gerhard Noller. Chr. Kaiser Verlag, München, 1967. S.316-340.

---

<sup>31</sup> Vgl. [GG1].

- PV: *Das Prinzip Verantwortung. Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation.* Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1979/1989. (『責任という原理——科学技術文明のための倫理学の試み』 加藤尚武監訳 東信堂、2000年。英語版は *The Imperative of Responsibility. In Search of an Ethics for the Technological Age.* The University of Chicago Press, Chicago/London, 1984.)

◇ その他の著作

- *Weiterwohnlichkeit der Welt. Zur Aktualität von Hans Jonas.* Hrsg. Christian Wiese und Eric Jacobson. Philo Verlagsgesellschaft mbH, Berlin/Wien, 2003.

なお、訳出に際しては邦訳のあるものは参照し、示唆をいただいた。記して感謝申し上げます。